

に入り、翌二十三年正月はここで迎えました。飯盒の掛盒に一杯のビールの配給があり、最初で最後のビールの味とともに「にがい」思い出です。ここでは建築現場の作業、零下何十度の寒中で、石灰水でセメントを練り、ブロック造りの家居造り。ここで特に苦勞したのは、貨車及び舟で運ばれた石灰、セメント降ろし作業でした。いつも休養中の時間帯に突如狩り出され、作業が、バラ積みめのセメント石灰を袋に入れて集積場所まで運搬するもので、狭い貨車、舟の中のこととて、粉煙で顔中真っ黒、毎回二時間余りの作業でした。以上が六月まで続き、中旬当地出発、六月三十日、ナホトカ出航、舞鶴に上陸七月三日、懐かしの故郷に帰りました。

私達は、幸いにか将校梯団に編入され、作業量及び内容等も、シベリア地区その他の抑留者とは比較にならぬものではありましたが、他国の空の下、侮辱と嘲笑の中、意欲のない作業を強制され、憤激と悲哀を感じつつも、何としても生きての帰国をと、我慢に我慢を重ね忍耐自重の毎日でした。

山田 大変ありがとうございました。たしかに他の地区とは異なる様子でしたね。私も将校ですが、毎日炭坑作業及び地上でも、凍土を割っての建築基礎掘りと作業は厳しく、その上、帰れば帰ったで毎日の如くの取り調べと続き、「死んだ方が」、幾度考えたか知りません。でも原さんが最後に言われたように、何とかして、の一言の為に帰り着いた一人です。本当にありがとうございました。

(聞き手・全抑協広島県連会長 山田 浩造)

敗戦抑留談

熊本県 西川 勝

一年繰り上げの徴兵検査で綏南の満州第八四八部隊(後第一五二三部隊と改称)に入隊した私は、昭和二十年六月、一期の検閲を終わり、東満の国境近い穆林の陣地構築に配備された。

八月九日作業中「ソ連軍が国境を侵し攻撃してきた。

直ちに帰隊せよ」との命令が伝えられた。日ソ不可侵条約はどうなったのだろう。隊に帰ると既に幕舎は倒され皆忙しく動き廻っている。身廻品を取り纏め、完全武装して部隊が集結したのは午後三時位か。

いよいよ出陣、張りつめた空気が伝わってくる。

我々は機関銃中隊の擲弾筒と大隊砲の小隊である。穆林の集落から約三キロも奥に入った丘陵に陣を敷き、早速各自で蛸壺掘りである。

時たま、ソ連の偵察機が飛来するが、友軍機は全然なく、心細い限りである。窪地を牡丹江に通じると思われる道路が走っている。蛸壺の一夜を過ごした翌日の夕刻、ソ連軍が猛スピードで進攻して来るとの情報伝えられた。

夕闇があたりを包む頃、気のせいか戦車らしき轟音が聞こえるようである。夜に入って、突然敵の照明弾が数発夜空に炸裂した。引き続き数発、昼のような明るさである。思わず蛸壺に身をひそめる。

十分と経たない内に混乱が始まった。敵と味方の砲撃が交錯し、隊長の号令さえ聞こえない。轟音と爆発

音、はじけるような発射音、映画で見た戦争とは全然違った騒音と閃光、正に修羅場とはこの事であろう。

あちこちから悲鳴さえ聞こえる。衛生兵の走る姿も見える。負傷者、戦死者が続出している様子だ。我が軍の兵器の劣勢さが極端に感じられる。

後方小豆山から時々発射される山砲の轟音が、頼もしく感ずるだけである。何時間戦闘は続いたか、ソ連軍の戦車の音も遠くなり、夜が白みかけた。

後方窪地に集合を命ぜられた。負傷者、蛸壺を直撃されて死亡した者等我が軍の損害は大きい。完全なる負け戦である。完全な姿で集結した兵は、半数にも満たない状況である。

草薙中隊長の悲痛な命令で、中隊は陣地を捨てて転戦するとの事である。昨夜の戦闘で、地形さえも変貌している。道さえもない傾斜地の山中を、一列に移動を開始した。

途中、重機大隊砲は分解して持ち運ぶ事とした。夜に入っても移動は続いた。前の兵が休めば休み、また出発、唯黙々と暗黒の山中を歩き続けた。まともに食

事もしていない。二日目の夕刻、遂に大隊砲と重機は山中に埋め軽装となった。

私は手榴弾二発、配られた乾パン三袋だけである。停れば眠り、起きては歩く事数日、既に乾パンもなくなり腹一杯飲んだ水は動く度に音がする。

このような夜も昼もない逃避行のうち、我々は、とうとう中隊からはぐれてしまった。乙幹の兵長以下八名である。連絡もとれず目的地もわからず現在地も確認できない。唯勘に頼って歩くのみである。

今日は何日だろう。小雨が降り出し、夕闇が迫ってきた。背丈程も伸びた草むらの中に集まり、今後の対策を協議する。この儘では山中で行き倒れか、捕虜になるしかない。

夜襲でもして敵中に切り込み、深く戦死しようと衆議一決した。

今夜はいよいよ切り込み隊だ。疲労と空腹、更には睡眠不足の体は、雨に濡れながらもとうとうと眠りに落ち入り、夜の来るのを待った。

何時間経過したであろう。ふっと眼を覚ますと夜が

明けている。周囲を見廻すが誰もいない。夢ではない。確かに現実である。昨夜迄の経過を思い起こしてみる。皆は予定通り夜襲を実行したのだろうか、それとも移動したのか、まるで狐につままれた気持ちである。

仕方がない。丘の小高い地点まで登ってみると、見渡す限り草原と喬木の林が連なり、家も人も全く見当たらない。

いよいよ一人ぼっち、この広野で野垂れ死にか、死を覚悟すると気もまた楽になる。現在地すら確認できないが南に歩こう。敵に遭遇すれば自爆すればよい。手榴弾の安全栓を抜いて、手に持ちながら出発。しばらく斜面を下ると細道に出た。何処かに通じているだろう。

歩くこと数時間、我が軍の撤収したと思われる所に遭遇した。天幕を張った跡である。

何か食物はないかと探すと鱈の干物が捨ててあった。数日前からの絶食で飢餓状態である。水溜りの水を飲みながら、むさぼる様に口に詰め込んだ。塩分もあり、水にふくれた干鱈は胃を満足させてくれた。

普通の状態であれば腹痛を起こす事だろう。残りのものを雑糞に納め、放置してあった地下足袋に取り替へ、少し生氣を取り戻し出発した。

時折草むらに寝そべりながら体を休めては歩き続ける事三日、勝手気ままな一人である。途中、日本兵の行き倒れ死体が転がり、既に異臭が漂っている。

合掌して念佛を唱えるが、悲しさも恐ろしさも感情を失った動物と同じである。

昼下り、突然日本兵の誰何を受けた。

草むらの中から監視していたのであろう。所属、氏名を名乗り、この集団に会うことができた。軍曹以下数名、林の中の窪地に屯して食事中であった。

地獄に佛とはこの事、馬肉と馬鈴薯を塩で煮たものを久し振りに腹一杯食うことができた。

同行を頼んだが、この辺一帯は敗残兵が多く、多人数の行動は敵に察知されやすいとの事、別行動を命ぜられた。冷たい仕打ちだが、仕方がない。肉少々をもらって、また一人出発。

夕暮れ間近になる頃、また二人の日本兵に出会った。

日本刀を持った下士官と小銃を持った兵である。自己紹介をして、行動を共にすることとした。

国境地帯の日本軍はすべて敗れ、ソ連軍は既に内陸に進攻しているらしい。せめて捕虜にならないよう、逃げのびるより他ない。

逃避行には相当の時間がかかるが、小人数の方が食糧の確保、自由行動に都合がよいとの結論に達した。

三人の共同防衛で微かに生きる望みが湧いてきた。食糧を分け合って、当夜は草むらの中で眠る事とした。頼る者がいる事で安心したのか、朝迄久し振りに熟睡する事ができた。

芋や干物を焼いた朝食をすませ、草原の細道を南に向かって歩き出した。昼下がり、五、六軒の民家が散在する斜面が見えた。

窪地をせせらぎが流れている。この辺も戦場と化したのであろう。人の気配は更にはない。家の周りは狭い耕地があるが、荒れ果てている。あたりを警戒しながら人家に入る。穀類や馬鈴薯、岩塩、味噌と食糧となるものはすべて確保した。

逃げる際、残して行ったものばかりで、土やごみが混じったままである。小豚が一匹走り出た。早速射殺して、小川のはとりで炊事を始めた。

急いでもどうにもならない。体力の補強が先決だ。またいつ食えるかわからない。多少元氣を取り戻したようである。

バケツに残りものを入れ、喬木林の中に隠れ、夜を過ごす事とした。急ぐ必要もない。後は運を天に任せて行動する他ない。まともな食事は勿論できないまま、一日五、六時間も歩き続け三人の逃避行は数日続いた。予定もなく、計画もない。幸い好天に恵まれ小川のはとりで体を拭き、裸になって休んでいると、数名の日本兵が現れた。将校、下士官、兵隊、何れも顔面は汚れ、髯はのび放題、破れた軍服の敗残兵である。

良く見ると奇跡にも草薙中隊長以下、本部の兵隊ばかりである。奇遇を喜び、その指揮下に入った。「ここから数キロ行けば牡丹江市である。砲声も聞こえないし、戦況は確認できないが、一応行く他ない」との事である。

しばらく行くと、牡丹江へ通ずる広い道が見える。大きなトラックが砂塵を巻きあげて走っている。広い道路に出て数分歩くと、先方からソ連軍のトラックが走ってきた。百メートル位前で停車し、ソ連の将校、自動小銃を構えた数名の兵隊が降車してきた。中隊長が従兵を連れて前進、我々はその場で待機した。話がまとまったのであろう。一人ずつ前進を命ぜられ、小銃、帯剣、弾薬等、武器はすべて一か所に放棄する事となった。

武装解除された兵隊は一列に整列を命ぜられた。所持品の検査である。時計、万年筆、眼鏡に至る迄、めぼしい物はすべて押収された。

戦争は終わったのである。神州不滅を洗脳された我々は敗戦は信じない。どのような形か停戦の協定がなされたのであろうと理解した。

武装解除を受けた日本兵は、ソ連兵の厳重な監視の下、延々と長蛇の列を作りながら歩かされた。

疲れた者は路端に休み、編成も指揮系統もない。追い越し、追い越され、唯黙々として、当てもない目的

地に向かつて、後に続いた。

到着した所は掖河、かつて日本軍が駐屯していた兵舎である。営門にはソ連兵が配置につき、到着順に人数を纏め、兵舎に連行された。

勿論、戦友も知人も一人もいなく、集団の中の一人として繰り入れられただけである。もうどうでもよい。日本へ帰るだけが唯一の望みである。収容所の生活が始まった。

長靴をはいたスマートなソ連軍の将校が通訳を連れて巡視に来る。食事は少量の穀類をスープにしたもの、或いは、高粱と、日に二回位不定期に配られたが栄養とてなく、黙って耐える他ない。時々狩り出される使役が辛い。

不安と焦燥、そして身心共に限界に達した兵の中には発狂する者迄現れた。微かな帰国の夢を期待しながら、囚人にも劣る日々が約一か月も続いた。

九月下旬、待ちに待った帰国の日が訪れた。我々の集団は駅に向かった。二段に区切られた有蓋貨車が並んでいる。身動きができない程詰め込まれたが、一刻

も早い帰国を期待する我々には、これでもありがたい事である。

外から施錠され、何両かが連結され発車した。上段に二十センチ平方位の灯り窓があるだけで、中は薄暗い。緩芬河を通り、ウラジオストクから海路帰国するとの噂である。

夕暮れの中緩芬河の国境を通り、ソ連領内に入った。汽車は轟音を響かせながら走り続けた。一夜が明けて小窓から外を覗いた兵が、汽車は西に向かつて走っているという。そんな筈はない。鉄道は迂回する事もあるので、そのうち東へ進むだろうと、互いに慰め合いながら希望を繋いだ。

夜もすぎ、やがて昼頃か汽車がとまり、貨車の扉が開けられた。全員降車、食事、排便と数時間停車である。

鉄道の両側は果てしない草原が広がり、民家一つなく、荒涼たる風景である。再び貨車に閉じ込められ、夜を徹して汽車は走り続けた。

翌日の昼下がりに、田舎の小さな駅についた。集落が

あるらしい。布を頭から巻いている女性、毛皮の帽子を被った住民が歩いている。

下車して食事をとっていると、物珍しげに寄って来る。ウラジオストックはこちらかと指を指すと、反対だという。方角といい、走行時間といい、疑う余地はない。完全に我々は欺されたのだ。帰国の望みは完全に断たれたのだ。

再び車中の人となったが、最悪の状態であり、暗い沈黙が続いた。放心状態で、考える事さえ煩わしい。虚無感に消沈しながら、汽車は数日走行を続けた。

何処へ行くのであろう。今となってはどうする術もない。ようやく停車した所は、人家もない草原の中である。

かつて精鋭を誇り、秩序正しかった日本陸軍も、今は全くその面影すらなく、ソ連兵の罵声に怯える烏合の衆に過ぎない。

疲労と空腹にふらつく足を引きずりながら黙々として監視兵の命に従う他ない。

何時間歩かされたか確かでないが、白樺等が林立し

ている山中に入った。

到着した所は西部劇にあるような木の門があり、少しばかりの平坦地に巨大な幕舎が張られている。

幕舎の先は、土手が傾斜となり、窪地を小川が流れている。ここはシベリア。今や虜囚となった現実を、完全に認めざるを得ない。

すべてが絶望である。翌日早速班が編成され、冬に備えての宿舎の構築と、木材伐採の作業隊に分けられた。

我が班は宿舎の構築。土手の傾斜地に奥行き二十メートル、幅五く六メートルの穴を掘る作業である。

入口が深さ二メートルもあろうか、先端は四メートル位の深い穴倉で、材木で支柱屋根をつくり、その上に覆土する。屋内には、暖房用のドラム缶を備えた宿舎が五棟程構築された。

天幕にツララが下がる十月下旬、ようやく完成し幕舎を撤去して穴倉住まいとなった。

到着以来、食糧は高粱、唐きび粉等粗悪で少量である。たまにアメリカ製のソーセージ缶が開けられたり、

樽に詰められた塩漬けの生ニンシが配られる。ニンシは頭、尾鰭、内臓、骨に至る迄が栄養源である。

ソ連兵は、数の子を食べない。雪の中に捨てられた頭や数の子を拾って缶詰の缶で煮て食うのは、幸せ者である。

入ソ以来一か月半、開戦以来の栄養不足と、体力の消耗に殆どの者が栄養失調である。

寒さと重労働に老兵は次々と倒れていった。更に、アミバー赤痢の発生とシラミの攻勢は、これに拍車をかけた。

暗い穴倉で隣に寝ていた友が一言も発せず、朝は帰らぬ人となっている。死体は裸にされて、小屋に転がっている。不思議に恐怖心もない。各々が死に直面して、もはや人間としての感情も忘れ去ってしまったのであろう。

十二月に入って、体力の衰弱している私は軽作業を命ぜられた。便所の整備、清掃、薪割り、死体の埋葬作業等である。便所も、鉄棒で氷の山を突き崩し、墓は鉄棒と十字鍬で掘るが、凍土は撥ね返るばかりで、

一向に深くならない。やむなく浅いまま死体を雪で覆って完了である。

雪解けには、きつと佛が露出する事であろう。しかも墓地ではなく、白樺林の山中である。

戦争ではぐれ、敗残兵で編成された私には、死体が誰であるかも判らず、何時死ぬかも分からぬ自分も同じ運命であろうと思うと、悲しみもあわれみも、超越しての作業である。

栄養失調も日毎に進み、思考力も衰え、自制心も失ってきた。悲しさに涙が流れ、止めようとしても止まらない。袴下のひもを解くと、足は油気が皆無で、表皮が白い粉状になって落ちる。正に生ける屍であるが、自殺する程の気力もない。

一月下旬身体検査を受けた。裸になって皮膚を摘んでの簡単な検査である。咳の発作を訴えると、とうとう病人と認定してくれた。

骨と皮ばかりにやせ細った数人が、翌日移動する事となった。保健隊か病院だろう。何はともあれ、この地獄の収容所からの脱出ができれば幸いであると感じ

た。

若いソ連兵に連れられて、汽車を乗り継ぎ、到着した収容所は、民家の点在する駅の近くにあった。ソ連軍の兵舎であろう、宮門を潜ると広場の奥に数棟の家屋が連なり、鉄条網を張り廻らした角々には望楼が聳え、毛皮に身を包んだ監視兵が銃を構えている。千名以上は収容されているだろう。本格的な捕虜収容所である。

入ソ以来初めて、まともな屋根、壁、窓のある家に入る事ができた。更に検診を受け、軽作業に従事する事となった。ペーチカや屋内外の掃除、薪の運搬、松葉採り等である。

ビタミンC補給の為、舎内には木樽の中に松葉汁が作られて、飲用としている。保健隊ともいうべき集団に移って少しばかり人間としての感情も戻ってきた。

月一回の入浴、衣類は熱消毒、陰毛も完全に剃られてのシラミ退治、気のせいか、体力も回復に向かいつつある。会社員として南満州で一冬を越した経験はあるが、シベリアの寒さとは雲泥の差である。

食事は相変わらず不足であるが、黒パンにスープ、山の収容所に比べると多少質が良い。やや元氣を取り戻した四月下旬、再び移動が命ぜられた。

一駅離れた収容所は、日本兵百名位とドイツ兵数十名が、同じ柵内に生活していた。

周囲には、民家と畑が広がっている。凍結した河の氷上を、上流から馬で材木を搬出している。野山の雪が消え、川の水が解けると急に春である。閉ざされていた山野にようやく生氣が甦り、植物の息吹きが感じられる。

短い春夏であるが、周囲のコルホーズでは、キウリ、キャベツ、馬鈴薯、燕麦と食糧が生産される。飢えた胃袋には、監視兵の目を盗んで何でも詰め込まれる。

ここで過ごす事約一年、盗み食い等で幾分体力を回復できた。二十二年三月、病弱者から選抜されて帰国の隊に加わった。

欺された身には、祖国の土を踏む迄どうしても安心できない。疑心暗鬼、夢に終わらない事を神に祈った。工事中のナホトカ港で、大郁丸に乗船し米飯と味噌

汁が配られた時、初めて生きていた喜びを味わい、熱いものが胸一杯広がっていった。

四十五年を経過した今日、今もなお連行される夢をみて、目を覚ます事がある。歳月は流れても、我々の心には、この事は決して風化する事なく、古傷として残っている。あの山中に埋められた戦友の霊は、永久に浮かばれないものがあるに違いない。場所も時も戦友の名前も思い起こせないものの、あの悲惨な現実は到底忘れ去ることはない。